

関西社会福祉学会/日本社会福祉学会関西地域ブロック第 55 回若手研究者・院生情報交換会
(日本社会福祉学会研究支援委員会第 4 回 CS-NET サロンとの共催)

テーマ：初期キャリア研究者にとっての共同研究の意義ー可能性、苦悩、戦略ー

開催日時：2024 年 2 月 11 日（日）14：30ー17：30

開催方法：ハイブリッド（対面及びオンライン(ZOOM)）

会場：同志社大学新町キャンパス臨光館 207 号

報告者：木村 友紀（関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程前期課程）

2024 年 2 月 11 日（日）14：30ー17：30 の 3 時間にわたり、第 55 回若手研究者・院生情報交換会（第 4 回 CS-NET サロンとの共催）が、「初期キャリア研究者にとっての共同研究の意義ー可能性、苦悩、戦略ー」をテーマとして開催された。ハイブリッド（対面及びオンライン(ZOOM)）で行われた。参加の事前申し込みは、80 名（対面：35 名、オンライン：45 名）であった。当日は、53 名（対面：28 名、オンライン：25 名）が参加し、33 名の院生を含む初期キャリア研究者が 45 名、ベテラン教員が 8 名であった。また、情報交換会終了後の懇親会には 22 名の方が参加した。

情報交換会は、木原活信会員（同志社大学）と高良麻子理事（法政大学、研究支援委員会委員長）の開会挨拶と姜民護会員（同志社大学）の趣旨の説明から始まった。続いて、全泓奎氏（大阪公立大学都市学科・防災研究センター教授）より、「学際的研究としての社会福祉学の挑戦」と題する基調講演をいただいた。本講演では、全泓奎氏が取り組んできた東アジア諸国の比較福祉政策や社会開発の研究を通して見えてきた共同研究の意義について報告されていた。国際共同研究の着想に至った背景には、東アジア包摂都市ネットワークの形成に向けて取り組んだ経験があったと語られていた。これまでのご経験を踏まえ、『研究力』とは『組織力』である（研究者・行政・実践家・当事者）」とともに、共同研究にあたっては「理論と実践を兼ね備えた実践的研究人材（『アクションリサーチャー』）の要請が求められており、それいかに応えていくのかがこれからの共同研究の課題」であることを、これから共同研究をする人たちへのアドバイスとしていただいた。

次に、3 名の報告者よりそれぞれのご経験から見えてきた共同研究の可能性、苦悩、戦略について報告いただいた。

第 1 報告者の高橋順一氏（新見公立大学健康科学部専任講師）は、大学院博士後期課程、IT 企業の研究所、大学教員として過ごす中で見えてきた共同研究の可能性・苦悩・戦略、そして、戦略としてさらに重要と考える事項（①次の時代の研究者を目指す、②生成 AI や識別系 AI で時代が変わる、③社会福祉学の特性や AI の欠点を意識する）について語られた。これまでのご経験から、高橋順一氏は共同研究に参加するとき、研究者それぞれの研究分野の特性や性格等が活かされることから、研究者の個性に応じて「様々な道があり、どれも長短がある」ことに触れた。そのうえで、「大学時代や若手時代における苦労や仲間を大切にしていくことが一番大切」であると言及され、初期キャリアの研究者が多くの人たちと切磋琢磨しながら研究活動に取り組んでいくことが重要であるとアドバイスいただいた。

第2報告者の孔栄鍾氏（佛教大学社会福祉学部准教授）は、これまでのご経験を通じて浮かび上がってきた共同研究の可能性、苦悩と戦略について語られた。孔栄鍾氏にとって共同研究は、研究能力の限界を超えて研究力の向上を図るといった可能性があることに加え、「方向性等を常に確認できる（必ずしも一致するわけではない）」ものであり、「視点・観点が広がる、理解が深まる」と説明されていた。また、共同研究には「『研究力』を高めるという保証はない」が、研究能力の向上を図り、「仲間づくり（縦のつながり、横のつながり）」やキャリア形成にも繋がるといった側面があることについて触れていた。共同研究の苦悩と戦略に関しては、「やりたいけど、できない」と「できるけど、やりたくない」との間で葛藤が生じることがあると述べられていた。また、それと同時に、「できないことが、できるようになる」ことや「やりたくないことが、やりたくなる」といった経験を楽しむことができたと言われていた。これまでのご経験を踏まえ、孔栄鍾氏は共同研究に参加するとき、「楽しく研究することがなにより重要」であることを、これから共同研究をする人たちに向けてアドバイスいただいた。

第3報告者の孫詩彥氏（国際日本文化研究センター助教）は、クラウドファンディングで研究資金を募って取り組んでいる共同研究について語られた。まず、研究プロジェクトの概要について紹介され、クラウドファンディングで研究資金を集めるに至った背景について説明されていた。その背景には、若手研究者が共同研究を組むことの難しさ、資金獲得のハードルの高さ、身分制限によるもの、若手・女性・外国人・人文社会系といったハンディキャップを受ける者同士の塊であるといった様々な困難に苦悩することがあったと述べられていた。これらの困難に直面してもなお、孫詩彥氏にとって共同研究に取り組む意義は、「リーダーシップが鍛えられる」「共同研究の仲間と相談しながら研究を進めることができる」「友人・仲間・上下関係を超えて関係性を切り替えて研究に関わるができる」ことにあると語られていた。これまでのご経験を踏まえ、孫詩彥氏は「初期キャリアで若手だからこそチャレンジ&模索しよう」と、初期キャリアの研究者に向けてアドバイスいただいた。

上記4名の方々による報告に続いて、姜民護会員の司会進行のもと、報告内容をもとにグループワークを実施した。その後、質疑応答が行われ、参加者の方々から寄せられた質問に対して4名の報告者よりコメントをいただいたのち、空閑浩人理事（同志社大学、日本社会福祉学会会長）と所めぐみ理事（関西大学、関西地域ブロック担当）より総括と挨拶をいただき閉会となった。今回の情報交換会には、全国各地から多くの方々に参加されており、グループワークや情報交換会終了後に開催された懇親会では、参加者間で情報共有や意見交換が行われ、盛会のうちに終了となった。

最後になりましたが、第55回若手研究者・院生情報交換会（第4回CS-NET サロンとの共催）の開催にあたり、多大なるご尽力を賜った学会員の方々をはじめ、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

以上